
右田毛利家庭園について

—男爵毛利祥久の足跡—

Migita Mohri Family Garden The Legacy of Baron Yoshihisa Mohri

藤田 智
Fujita Satoshi

摘要

本論は、毛利家1門8家で1万6千石を知行していた家老家である右田毛利家13代毛利祥久が築庭した御田屋庭園について、大正時代の庭園写真原版や「右田毛利家日誌」、右田毛利家ゆかりの春日神社石造物の撰書陰刻を研究資料として、庭園築造に至った経緯および関わった人物等を考察し、築庭の背景や築庭関係者、毛利祥久の足跡等を明らかにした。

Abstract

This paper examines “Otaya Garden”, built by Yoshihisa Mohri, who was the 13th head of Migita Mohri family. The Migita Mohri family was one of the eight branch families of the Mori clan and governed a fiefdom of 16,000 koku. This study investigates the circumstances leading to the garden’s construction and those involved in its creation. The research draws on materials such as original photographs from the Taisho era, the Migita Mohri family diary, and inscriptions on stone monuments at Kasuga Shrine, which is associated with the family, to trace the legacy of Baron Yoshihisa Mohri.

1. はじめに

現存する右田毛利家庭園（「御田屋庭園」）について、大正9年(1920)11月16日付『防長新聞』には、「男爵毛利祥久氏は14日午後2時より2百餘名を招き本邸新築披露宴を催した。同邸は右田嶽山麓に位置し東北は石州街道を隔て矢筈嶽及び天神山を望み邸内の樹木は凡て泉水と共に古色を呈して」と記され、右田毛利家の栄華を今に伝える庭園を知ることができる。右田毛利家¹⁾に関する数少ない資料の中で、『右田邑主 毛利内匠(藤内)小伝』²⁾には、毛利内匠³⁾以外に男爵毛利祥久⁴⁾についてわずかに触れている程度である。また、『防府史料』⁵⁾に「御田屋庭園」の写真が掲載されているが、説明等には史実と齟齬がある。そこで、筆者は、「御田屋庭園」写真⁶⁾の原版を入手し、精査した結果、写真の人物や撮影年代の特定ができた。ここでは、右田毛利家に伝わる大正8年(1919)2月1日から大正11年(1923)12月31日の「右田毛利家日誌」⁷⁾（以下「日誌」）翻刻や右田毛利家ゆかりの神社石柱と鳥居の撰書陰刻を解釈し、「御田屋庭園」築庭について状況や男爵毛利祥久の足跡をさぐるものとする。

2. 御田屋庭園写真について

(1) 写真の中の御田屋庭園

書院前には池が広がり、その手前にかなり大きい自然石の石橋が架かり、書院右手には六角型石燈籠と四角型

九重層塔石燈籠がみられ、経年の雨水により苔などが付着して薄暗く見える。対照的に崩れ石積や池の護岸などは色が白く見える。これは、石燈籠等が古物であるのに対して、崩れ石積や護岸の石は新たに山取されそのまま使用されたことを意味する。また、池周辺の下物などは小ぶりなものが多いが、対照的に南側は樹木の数も多く、高木が多い印象である。

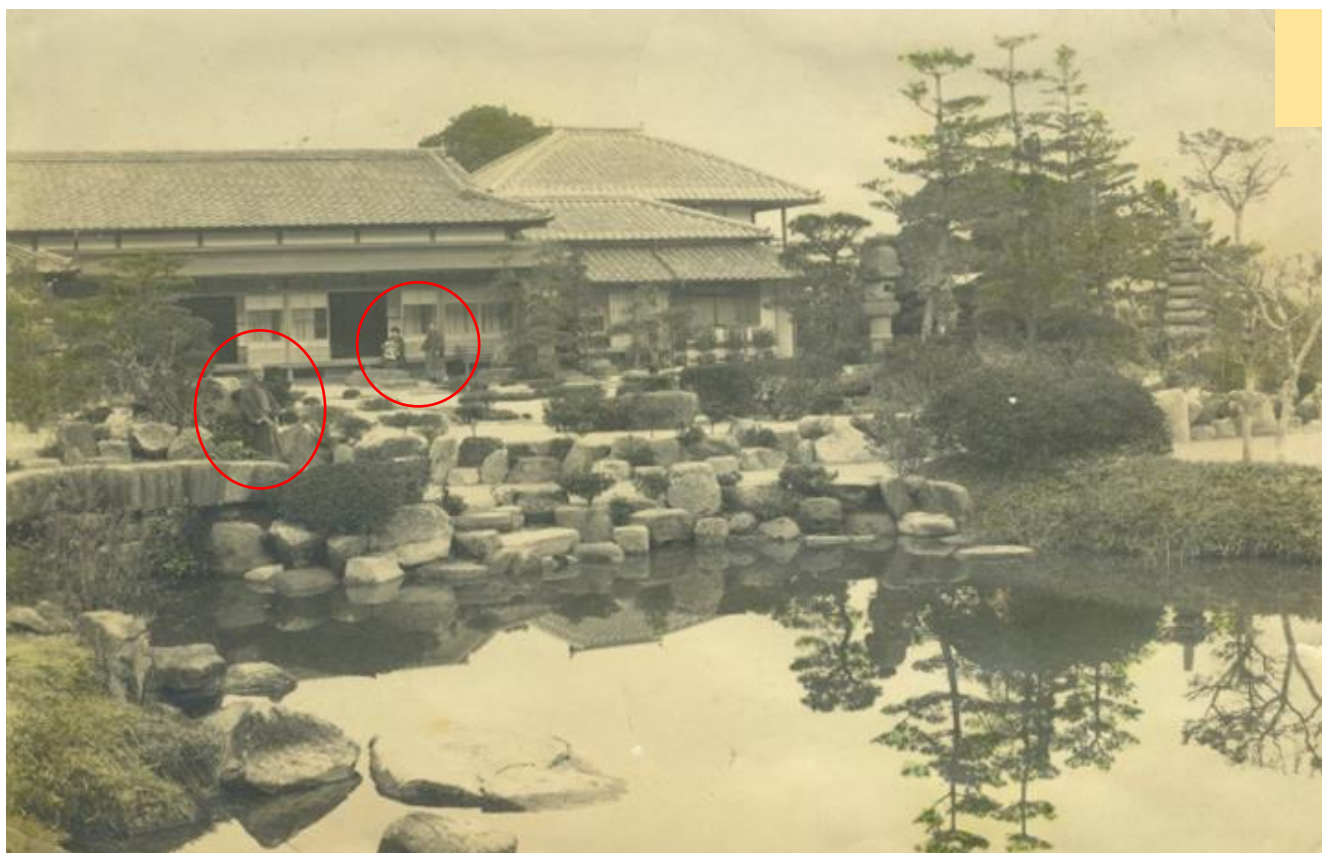
(2) 写真中の人物の特定と撮影年代

前述したように写真を精査した結果、写真左端の石橋後方には右田毛利家 13 代男爵毛利祥久が写っている。書院の沓脱石付近に立っているのは右田毛利家 14 代毛利重雄⁸⁾と華子夫人⁹⁾であり、夫人に抱かれているのは 15 代祥允¹⁰⁾である。祥久と重雄は袴をはいていることから祥允誕生の記念写真であろう。『防府市史』¹¹⁾には、「御田屋庭園」の写真が『防府史料』からの転載とされており、「昭和 30 年ころの御田屋庭園」とあるが、祥允は昭和 2 年(1927)生誕でありこの写真は昭和 2 年ごろに撮影されたものと考えられる。

(3) 火災前の庭園について

「某屋敷図」¹²⁾と「屋敷差図」¹³⁾が山口県文書館所蔵の右田毛利家文書内にある。「某屋敷図」には東側に門があり庭は北、南、西側と屋敷中(内庭)の 4ヶ所に造られていた。後述する「日誌」には旧宅を全部焼失し、記録なども失ったとある。火災以前の屋敷の構成は不明であるため「某屋敷図」や「屋敷差図」と比較することは困難で、火災後の建物や庭園は大きく縮小されたものであると推測される。また「右田毛利家十二冊記録 御蔵元」¹⁴⁾には、「一、御庭普請等終日相勤候時は中飯立被遺候事」「一、大工萩右田往来之時分」とあることから近世期には、大工や植木屋などの職人が萩屋敷と右田屋敷を往来して請負うことが少なくなかったようである。廃藩置県以後には近場の職人に管理させたものと推測される。

御田屋庭園の写真からは、屋敷再建直後の庭園築造の様々を知ることができる。



祥久(左) 重雄、華子、祥允(右)

写真1 御田屋庭園(個人蔵)

3. 日誌から知る庭園の一端

(1) なぜ築庭は始まったのか

土井貞助（右田毛利家の家政を担当）らが書き残した大正8年(1919)2月1日から大正11年(1923)12月31日までの「日誌」が蔵されている。右田毛利邸への人の出入りを主に記したものである。ここでは、屋敷や庭園の築造にかかわる人々のことを知ることができるので、火災から3日間を原文翻刻して掲載し、4日以降は本稿後の表に示す。

二月一日「本日午後十時頃御旧宅ヨリ発火、御旧宅全部并ニ諸記録其他備品不残焼失、此損害價格約一万五六千円実ニ終生ノ壞事ナリ、此日丁度陰曆元旦ニ相当セルヲ以テ各戸御酒ヲ頂キ早ク眠ニ就キシヲ以テ気付ク事既ニ遅之消防夫の駆ケ付タル頃殆ンド全部ヲ嘗メ盡セリ、如何トモ為シ術ナカリキ只無念共涙ヲ吞ンデ茫然自失、嗚呼漸ク午前二時頃鎮火セリ、消防隊ノ駆付ケシハ本村第一第二第三第四第七并ニ公設消防隊ハ申スニ及バズ、防府町第一支部小野村鈴屋真尾ノ九組ナリキ」

二月二日「本日午前九時頃ヨリ上右田戸主会員及第七区民軍人団第三班全部出邸、跡始末ノ為メ大々の活動ヲナセリ、午後五時頃大略始末ヲ付ケ終テ握り飯酒ノ饗応ヲナシ午後六時過ギ一同退散セリ、夫レヨリ幹部連二十余名ヲ招キ握り飯及酒ヲ饗ヒ午後十時頃漸ク退邸セリ」

二月三日「本日モ早朝ヨリ終日見舞者応接跡始末等多忙ヲ極メ、甲谷勘之進¹⁵⁾藤井安熊両氏出邸手伝セリ一本日土肥ハ早朝ヨリ多々良御殿へ御見舞ノ御礼トメ参り候」などと火災直後の様子が記されている。

前記「日誌」によると、2月1日午後10時頃、旧宅より発火し、旧宅全部と記録などを焼失、翌午前2時頃鎮火した。2月1日は、旧正月にあたるため酒をいただきており火事に気付くのが遅れ、消防が駆け付けた頃には全て失われていた。2月2日は、午前から上右田の住民などが後始末を行い、握り飯と酒でもてなした。2月3日は、見舞い者への対応と後始末で多忙をきわめた。土井貞助は、多々良公爵毛利家へ見舞いの礼に伺っており、火災直後の慌ただしい様子がうかがえる。

大正8年(1919)に起きた火災によって旧宅が全焼したため、屋敷の再建に取り掛かることが急務となった。そのため大正8年9月24日「上河原へ御引越之為メ荷仕舞及運搬ニ多忙」とあるように荷物を運び出し、大正8年

(1919)10月16日「原建築技師出邸」そこから原建築技師¹⁶⁾により、再建計画が立てられた。そこで屋敷の再建と同時に旧宅跡地の一部に庭園を整備したものと考える。

(2) 築庭師と植木屋と上司淵蔵

大正8年(1919)9月27日には「植木手入レ」とあり、植木屋が登場する。大正9年(1920)3月15日の上棟式後の26日に「築庭師木村由太郎出邸」、同年4月18日には「木村由太郎及手傳一人下宿日雇四名手入共」、同年5月14日には「築庭手傳一人植木買入之為山口へ帰ケリ」とある。築庭者木村由太郎という者の存在は確認できていないが、山口市から右田屋敷に下宿し築庭を行った庭師達であることは推測できる。ではなぜ山口市の職人が出入りするに至ったかについては、上司淵蔵¹⁶⁾が関係している。淵蔵の祖父主税から右田毛利家とは縁があり、藩老中益田越中、毛利内匠等の重臣より信頼を得ていた。また、毛利内匠らが発起人となり明治10年(1877)に開校した三田尻周陽学舎の校長に上司淵蔵が明治30年(1897)就任している。明治33年(1900)「毛利家銅像建立事業」¹⁷⁾の委員長を務めており、亀山公園事業の庶務、建設、工事の委員長も兼ねていた。また、公爵毛利家からの信頼も厚く、多々良毛利本邸新築工事の築庭事務なども任されていた。亀山公園築造事業を赤井¹⁸⁾（初代彌助）に紹介したのも上司である。赤井（株式会社広楽園）は、明治5年(1872)山口市で創業した造園会社で大正8年(1919)当時赤井には全国から修業に入る職人、流れの職人、夫婦で住込み働きするものまで含めて30名程度の職人が出入りしていたとされており、その中の築庭を得意とする者達が、既に入居していた赤井の職人でもあった植木屋石田善太郎もしくは上司淵蔵を通じて右田毛利家庭園築庭に関わった可能性が高い。大正10年(1921)3月21日「植木屋石田善太郎外二名出邸」とあり、下宿とは記されていないことから地元の植木屋であると推測される。大正8年(1919)9月27日の「植木の手入レ」はこの石田善太郎¹⁹⁾とみるべきであろう。

(3) 大正8年から11年迄

「日誌」に登場するその他の人物や事柄についてまとめてみる。大正8年(1919)2月24日には徳山毛利家御見舞とある。徳山毛利家²⁰⁾は、大正4年(1915)春からの新築工事中の火災で土蔵2棟書院1棟以外を消失している。



写真2 御茶屋橋 (山口県立山口図書館蔵)

大正8年(1919)2月4日「大工四名工事ニ当タル」大工は、佐々木房吉、息子の定吉他で火災から3日目には作業に従事している。大正8年(1919)2月6日「大工左官出邸」の左官は、国本延太郎であり大正8年には出入りしているが国本の名前は確認できなかった。大正8年(1919)11月14日「色三右月や原田宇吉」とある。原田宇吉²¹⁾とは右田村の石工である。大正5年(1916)完成の多々良毛利本邸新築工事の石工事や大正7年(1918)松崎神社石柱、大正11年(1922)山口市御茶屋橋(写真2)の架換えや下右田の剣神社には大正15年(1926)建立の円石柱1対が石工原田宇吉の名で残されている。「日誌」によると、大正10年(1921)9月12日「原田宇吉外一名及手傳三名出邸御馬場修繕」馬場の修繕を行っている。この馬場とは(図1)「上右田村荒図」²²⁾内の杉馬場であり、大正10年(1921)当時まだ残されていたことがわかる。大正8年(1919)10月16日「原建築技師出邸」とある。原技師とは、大正5年(1916)10月完成の多々良公爵毛利本邸新築工事にも技師として携わる。大正9年(1920)5月6日「岡田及石丸兩人山口ヨリ植木持帰り之為メ車カヲ以テ参リ」の岡田²³⁾とは、防府市平和町の岡田造園初代で明治32年(1899)生まれの房一である。石丸²⁴⁾とは、防府市上右田の石丸造園の初代と思われる。この岡田と石丸兩人が赤井と関係のある職人と共に築庭に携わっていたのである。大正9年(1920)7月28日「表具師後藤出邸」の後藤は確認できない。大正9年(1920)11月16日「田中柏蔭代理御禮ノ為メ出邸」の田中柏蔭²⁵⁾とは、右田に居を構え山水画を得意とした画家である。大正10年(1921)1月14日「山田邸上棟式」の山田家²⁶⁾とは、右田毛利家の隣地に移住した親族である。

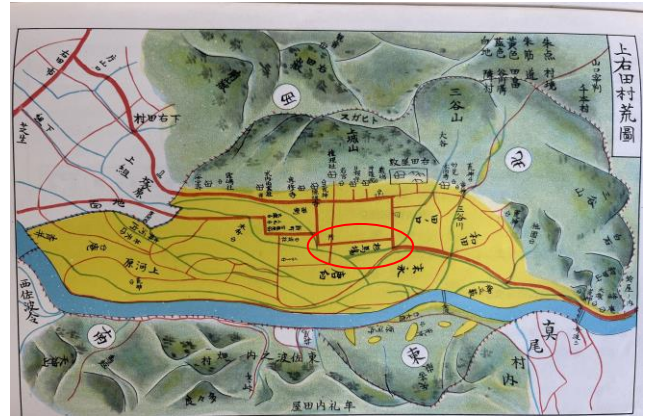


図1 上右田荒図 (山口県立山口図書館蔵)

大正10年(1921)3月8日「内田医師同道ニテ出邸」の内田医師とは内田小弥太²⁷⁾という佐波郡右田村の開業医で、右田屋敷に出入りしていることが残されている。写真3は、昭和4年(1929)3月に「三田尻高等女学校創立記念」²⁸⁾で撮影された写真である。そこには毛利祥久、田中柏蔭、内田小弥太などが写っている。学校設立のため委員代表には名門名士の参加が必要との観点から毛利祥久と田中柏蔭に懇請している。祥久と柏蔭の両氏を取り持ったとされるのが内田小弥太である。²⁹⁾ 大正10年(1921)9月3日「京都表具師等出邸」とあり大正11年(1922)3月10日「京都表具師横井秀次郎出邸シ表具代ヲ頂キタリ」とあり京都の表具師が請け負っている。大正10年(1921)10月30日「山口木梨様御上様代理ノ為出邸」の木梨とは斎藤理、渡部史之の論文³⁰⁾に詳しく述べられているが、祥久の子亀亮は明治35年(1902)3月20日に養子願いが出されており男爵木梨精一郎の養子になっている。近年、祥久以降の書簡数枚が発見され、木梨亮一から祥久に宛てた病臥見舞いも含まれていた。³¹⁾



内田小弥太(上左) 田中柏蔭(下左) 毛利祥久(下右)
写真3 三田尻高等女学校創立記念写真(個人蔵)

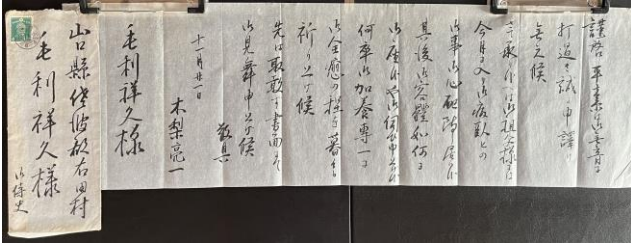


写真4 毛利祥久書簡（毛利家蔵）

大正11年(1922)10月5日「画家岡邨雪畝侍候」の画家岡邨雪畝³²⁾については一枚の絵が確認できた。

(4) 築庭材料から庭園を考える

「日誌」には、池の護岸や崩れ石積で使用されている石材、樹木などの詳細は記されていないが、毛利家の事例をもとに比較考察する。まず、石材は『公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』³³⁾によると「一各所据付アル大野面石・飛石共総テ御所有地山林内ヨリ運搬使用ス」とあり、石燈籠や石橋などの石造物以外の石材は裏山から採取するというのである。右田毛利家臣であった桂家³⁴⁾の「月の桂の庭」においては、福田和彦³⁵⁾が「石材は右田ヶ嶽の山中から産出する岩石を用いている 白砂もおなじ山砂である」としていることから右田毛利家において裏山の石材（花崗岩）を使用したものと考えのが妥当であろう。樹木においては、大正9年(1920)4月29日「木村植木買入ノ為メ廣嶋へ出浮タリ」30日「木村帰邸」これは当時植木の買付け地として主に広島であったのだろうか。『公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』内で、「一楓及ビツツジ・玉ヒバノ類ハ苗木ヲ購入、構内耕地ニテ培養シ植付ケ、檜及ビ樅ノ類ハ山口町香山園山林内ヨリ移植ス」とある。「日誌」の中で、築庭師 木村由太郎が広島へ買付けに向かっていることや手傳が山口へも出かけ植木を持ち帰っていることで、一部の樹木は購入しその他中木などは裏山から採取したものと推測できる。大正9年(1920)6月11日「築庭跡片付岡田外一人」とあることから、築庭工事がおおむね完了したと思われる。大正9年(1920)11月14日「園遊会百七十八名軍人官吏神職」で屋敷と庭園が披露されている。「御田屋庭園」築庭工事は、大正9年(1920)4月13日から同年6月11日ごろ迄に関わった人数は「日誌」から割り出し延べ120人位であった。

4. 祥久の撰書陰刻

防府市牟礼にある春日神社³⁶⁾には、大正9年(1920)祥久揮毫による一対の石柱と大正13年(1924)建立の「昇格記念碑」、昭和5年(1930)祥久の書が陰刻された鳥居が残されている。右田毛利家四代就信³⁷⁾は、寛文5年(1665)鳥居(第2)を寄進し寛文7年(1667)社殿を再建、鳥居には「武門繁栄 邦国安泰」と撰書している。そこで祥久揮毫の漢文を解釈し大正9年(1920)と昭和5年(1930)を比較する。大正9年(1920)建立の石柱一対には、「五典惟秩・三徳惟致」とあり「五典惟秩」(父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝という順序を守るべき)「三徳惟致」(智、仁、勇は持つべき)である。昭和5年(1930)建立の第1鳥居には、「天地交泰・禎符咸臻」とあり「天地交泰」(陰陽の融和が大切)「禎符咸臻」(吉兆や良いことがみな集まってくる)となる。大正9年(1920)と昭和5年(1930)の火災直後と時間が経過した後では漢文の撰書に明らかに変化をみることができる。そこには大正8年(1919)の火災から屋敷と庭園を完成させ、次代重雄と華子の婚礼と孫祥允の誕生で末代安堵の胸中をうかがい知ることができる。祥久は、内匠が開設した「移風義塾」³⁸⁾の校長を受け継ぐほか、禅学講話会への出席³⁹⁾など漢籍の講究に熱心であった。春日神社に漢文を残すということは、社殿の再建などを行った就信をリスペクトしながらも右田毛利家と春日神社の相補的關係と牟礼村、右田村そして防府町の包括的關係を願ってのメッセージが込められているものと考ええる。



写真5 春日神社第一鳥居 (2023/9 著者撮影)

5. おわりに

本稿は、昭和2年(1927)に撮影された火災後再建された右田毛利家御田屋屋敷と庭園の写真の年代を特定し、写真の庭園や人物等の解読を試みた。さらに、火災直後の屋敷と庭園の復興期に書かれた「日誌」や当主男爵毛利祥久揮毫の春日神社の陰刻漢文などを通して、祥久の手柄が様々な人を呼び寄せ、屋敷と築庭の完成へと結びつける足跡を辿ることができた。

華族としての体裁を保ちながら生き抜いてきた祥久にとっては、屋敷の再建や庭園築造、右田毛利家の復興を成し遂げ、四男の婚姻、孫祥允誕生と右田毛利家の繁栄の継続と次代への継承を願う伝言が昭和二年に撮影させた写真に込められたものであると推測できる。

本稿執筆に際し、防府市文化スポーツ観光交流部 文化振興課 文化財室 調査係 鞆雅子氏にはご教授いただき感謝申し上げます。

表 「日誌」2月4日以降

和暦	西暦	月	日	事項
大正8	1919	2	4	大工四名工事ニ当タル
大正8	1919	2	6	大工左官出邸
大正8	1919	2	9	焼木始末
大正8	1919	2	24	徳山毛利家見舞
大正8	1919	8	13	石垣組代為メ宇吉倅及日雇四名出邸
大正8	1919	8	29	重雄様英子様富海御明荘ヨリ御帰邸
大正8	1919	9	23	大工出邸小屋掛ニ取り掛リタリ
大正8	1919	9	24	上河原へ御引越之為メ荷仕舞及運搬ニ多忙
大正8	1919	9	27	植木手入レ
大正8	1919	10	16	原建築技師出邸
大正8	1919	10	21	左官及ビ植木屋出邸左官延ビ田中技師出邸
大正8	1919	10	22	菊鉢植ヲ山田邸へ移轉 植木屋二名出邸
大正8	1919	10	23	菊鉢植前日残余ヲ移轉 植木屋二名出邸
大正8	1919	10	24	植木屋二名出邸
大正8	1919	10	25	大工房吉出邸 (三日間)
大正8	1919	11	14	色三右月原田宇吉之夕折りケリ
大正9	1920	3	15	上棟式
大正9	1920	3	26	築庭師木村由太郎出邸
大正9	1920	4	13	本日ヨリ木村由太郎外三名出邸
大正9	1920	4	18	木村由太郎及手傳一人下宿日雇四名手入共
大正9	1920	4	19	築庭日雇平口外四名
大正9	1920	4	29	木村植木買入ノ為メ廣嶋へ出浮
大正9	1920	4	30	木村帰邸
大正9	1920	5	5	植木屋二人夕方ヨリ山口へ植木取入之為出浮タリ
大正9	1920	5	6	岡田及石丸両人山口ヨリ植木持帰り之為メ車カヲ以テ参リ
大正9	1920	5	8	木村由太郎植木買入ノ為出浮タリ
大正9	1920	5	14	築庭手傳一人植木買入ノ為山口へ帰ケリ
大正9	1920	6	11	築庭跡片付岡田外一人
大正9	1920	7	28	表具師後藤出邸
大正9	1920	10	13	築庭師木村外二名出邸
大正9	1920	11	14	園遊会百七十八名軍人官吏神職
大正9	1920	11	16	田中柏蔭代理御禮ノ為メ出邸
大正10	1921	1	14	山田邸上棟式
大正10	1921	3	8	内田医師同道ニテ出邸
大正10	1921	3	21	植木屋石田善太郎外一名出邸 (三日間)
大正10	1921	3	26	御門内横垣御植替
大正10	1921	4	4	井上峯三某他男女八名松苗植付ノ為出邸
大正10	1921	7	1	左官延太郎出邸
大正10	1921	8	18	植木屋石田出邸
大正10	1921	9	3	京都表具師等出邸
大正10	1921	9	5	大工房吉出邸山田邸修繕
大正10	1921	9	10	御植木手入ノ為石田善太郎外二名出邸
大正10	1921	9	12	原田宇吉外一名及手傳三名出邸御馬場修繕
大正10	1921	9	16	植木屋三名出邸 (二日間)
大正10	1921	9	18	植木屋三名出邸 (十日間) 左官国本延太郎出邸
大正10	1921	9	28	左官延太郎手傳文一出邸
大正10	1921	10	12	植木屋石田善太郎外二名出邸 (三日間)
大正10	1921	10	19	大工佐々木ノ弟子出邸
大正10	1921	10	30	山口木梨様御上様代理ノ為出邸植木屋石田善太郎計算之為メ出邸
大正11	1922	3	8	内田医師出邸
大正11	1922	3	10	京都表具師横井秀次郎出邸シ表具代ヲ頂キタリ
大正11	1922	6	20	石工原田出邸井戸修繕
大正11	1922	6	21	石工原田外一名出邸 (三日間)
大正11	1922	7	23	大工佐々木房吉鶏固屋改築出邸 (九日間)
大正11	1922	8	10	佐々木定吉息子出邸作事アリ
大正11	1922	8	25	水道修繕ノ為佐々木定吉及房吉出邸
大正11	1922	9	10	石工原田御馬場修繕工事ヲ初ム
大正11	1922	9	21	植木屋石田善太郎外二名出邸揃込ヲ為セリ石工原田宇吉私用出邸
大正11	1922	10	5	画家岡邸雪敵伺候

註

- 1) 防府市『防府市史 通史二 近世』平成11年(1999)。寛永2年、2代元俱は藩内の領地替えにより三丘から佐波郡右田に移り1万6千石を領することになる。右田に本拠を置いたため右田毛利と呼ばれた。
- 2) 野方春人 『右田邑主 毛利内匠(藤内) 小伝 改訂版 長州藩家老・維新戦争長州軍総大将』(伊都大学出版部 平成25年(2013))。
- 3) 毛利 親信(もうりちかのぶ、常太郎、内匠、藤内)男爵。嘉永2年(1849)、長州藩士村上惟庸(むらかみ これつね)の長男として生まれる。慶応4年(1868)鳥羽・伏見の戦いに参加し勝利を収める。北越戦争、会津戦争にも参加して戦功を立てる。明治11年(1878)第一百国立銀行創業に当たり、頭取を命ぜられる。明治18年(1885)5月に死去。御園生翁甫『山口県右田村史』昭和29年(1954)。
- 4) 毛利祥久(もうりよしひさ)男爵 安政7年万延元年(1860)3月生まれ明治4年(1871)右田領主毛利内匠の養子となる。第一百国立銀行の取締役 明治20年(1887)11月、「取締役毛利祥久、支配人草刈隆一の名義をもって愛知県の三河干拓(毛利新田)の築立に着手したが明治25年(1892)に暴風雨により堤防が破壊、浸水で多くの死亡者が出たことで遂に開発を断念した。『山口銀行史』 明治30年(1897)10月授爵通知 明治30年(1897)10月列華族通知 明治39年(1906)金杯伝達書昭和16年(1941)12月死去。
- 5) 防府史料保存会 『防府史料』 第八輯 昭和39年(1964)。
- 6) 『防府史料』第八輯(御田屋庭園写真)令和4年(2022)に筆者が所有者個人から原板をお借りし、拡大コピーしたものである。
- 7) 「日誌」(右田毛利家文書) 毛利家務所 武田版土井貞助、三保貞三、岡本絢甫らが書き残した大正8年(1919)2月1日から大正11年(1922)12月31日までの日誌である。(山口県文書館蔵)。
- 8) 毛利重雄(もうりしげお)男爵 明治34年(1901)生まれ。松崎神社宮司や三田尻女子高等学校第三代設立者代表 昭和48年(1973)死去。
- 9) 毛利華子(もうりはなこ) 明治38年(1905)生まれ。男爵四條隆英の二女 昭和58年(1983)死去。
- 10) 毛利祥允(もうりしょうすけ) 昭和2年(1927)生まれ。三田尻女子高等学校第七代育友会長、平成13年(2001)死去。
- 11) 防府市教育委員会『防府市史 通史II 近世編』平成10年(1998)。
- 12) 「某屋敷図」(右田毛利家文書1616)(山口県文書館蔵)。
- 13) 「屋敷差図」(右田毛利家文書149)(山口県文書館蔵)。
- 14) 「右田毛利家十二冊記録 御蔵元」(山口県文書館蔵)。「右田の領主、長州藩一門家老右田毛利家の領政百般の故事先例や、処務の準拠となる事項を御蔵元役所で集成したものであって、12冊から成るによって「十二冊記録」と題されている。原本は右田毛利家の旧蔵であって、現今山口県文書館に収蔵されている」(防府史料 第八輯)。
- 15) 山口県文化財愛護協会(『山口県文化財 42 特集 山口県近代和風建築総合調査』福田東亜)。原竹三郎は毛利家防府邸の設計者であり明治40年に北沢虎造により、井上馨に推挙された人物である。明治30年代には、公爵毛利家の分家長府毛利邸も設計に従事した。原は技師兼工務課長に任命され以後この本邸完成まで技術面における指揮をとることとなった。山口県教育委員会『山口県の近代和風建築』山口県近代和風建築総合調査報告書 平成23年(2011) 福田東亜が詳しく記している。
- 16) 上司淵蔵 来栖守衛『上司先生傳記資料』昭和6年(1931)5月 嘉永2年(1849)佐波郡(現防府市)宮市で生まれ、「毛利家銅像建立事業」において委員長を発起から落成まで12年勤め最後は庶務に居りて工事を兼ねていた。香山園廟所、豊栄野田神社、高田公園等の工事にも携わる。明治40年(1907)11月から明治41年(1908)3月迄、多々良毛利邸にて元昭と和歌を吟じるなど、公爵毛利家とも交流を深めていた。(続防府市史)
- 17) 山口市役所『山口市史』昭和57年(1982)。明治25年(1892)11月に起工式を挙げ同33年(1900)4月に完成し除幕式を挙した。
- 18) 山口市中央の造園業 株式会社広楽園は明治5年(1872)植木商及び造園業として創業、明治33年

- 「毛利家銅像建立事業」を手始めに 県内の工事に携わる。(株式会社広楽園 赤井哲春氏より聞き取り)
- 19) 石田善太郎 山口市の造園業赤井(株式会社広楽園)の創業者赤井彌助代の職人で赤井と共に山口へ移住した後、赤井を離れ明治 40 年現在地である防府市国分寺町で造園業石田植木を始めた。
- 20) 徳山市役所『徳山市史史料』昭和 39 年(1964)。徳山毛利氏の始祖就隆は毛利輝元の二男である。元和 3 年兄秀就から都濃群内にて高 3 万石の地を分封され、同 7 年その半数の換地が行われた。寛永 11 年幕府から諸侯の認可をうけたが、正徳 6 年(享保元年)宗藩と紛争を生じて改易、享保 4 年再興した。天保 7 年城主格となり、明治 4 年 6 月廢藩置県に先だって宗藩に合併した。大正 5 年(1916)3 月 24 日付『防長新聞』には、「徳山毛利家新邸焼く」とある。前年の大正 4 年(1915)春からの新築工事中の火災で土蔵 2 棟書院 1 棟以外を消失したものである。新築工事を請け負っていたのは東京の手塚兼吉であった。徳山毛利家火災の記事について防長新聞が 2 回に分けて載せているが、右田毛利家については火災そのものの記事は確認できない。
- 21) 石工原田宇吉『防長新聞』大正 11 年(1922)9 月 23 日付「御茶屋橋の架換」山口町中河原御茶屋橋の架換えを「二千六百七十園」で落札したとあるが、現在の橋はコンクリート製で昭和 39 年 12 月竣工である。写真 2「御茶屋橋」(一般 郷土史料 『山口県案内』大正 12 年発行)。
- 22) 山口県立山口図書館『防長風土注進案』昭和 39 年(1964)。
- 23) 岡田造園(株)岡田造園 松本孝子氏より聞き取り)。
- 24) 石丸造園 2 代目石丸幸男が平成 16 年(2004)亡くなり廃業。
- 25) 田中柏陰 慶応 2 年(1866) 静岡で生まれ京都の田能村直入に師事その後佐波郡右田村の田中家の婿養子となり京都と右田に画塾を設け後進を育てた人物である。昭和 9 年(1934)静岡で死去。(続防府市史)(右田村史)(ふるさと読本右田)
- 26) 山田家 15 代 16 代頃に毛利家寄組となり、その後給領地小鯖の領主になる山田保助と祥久の長女との婚姻により現在地に移住。
- 27) 内田小弥太の診療所については、『防長新聞』大正 4 年(1915)5 月 29 日付・「内田医院落成式 二十四日～四日間落成披露宴」に毛利祥久など五十名が招待されたとある。この診療所の建物は現在も上右田の同場所に残る。
- 28) 学校法人三田尻女子高等学校『写真でたどる三田尻女子高等学校のあゆみ』平成 14 年(2002)。大正 15 年(1926)米沢菊五郎によって「三田尻高等女学校」として創設されるが、昭和 23 年(1948)4 月より校名を「三田尻女子高等学校」に改称した。
- 29) 前掲註 29『写真でたどる三田尻女子高等学校のあゆみ』平成 14 年(2002)。
- 30) 斉藤理・渡部史之「地域文化財からみた木梨精一郎」山口県立大学学術情報 第 10 号(国際文化学部紀要 通巻第 23 号) 2017 年。
- 31) 「木梨家文書」156 養子願 毛利祥久二男(山口県文書館蔵)
写真 4「木梨亮一より毛利祥久への書簡」(毛利家蔵)
(本文)
- 謹啓 平素は御無音に
打過ぎ誠に申訳け
無之候
さて承り候へば御祖父様には
今月に入り御病臥との
御事御心配致し居り候
其後御容体如何に
御座候や御伺ひ申上げ候
何卒御加養專一に
御全癒の程を暮々も
祈り上げ候
先は取敢ず書面にて
御見舞申上げ候
敬具
十一月二十一日
木梨亮一
毛利祥久様

- 32) 岡邨雪畝（おかむらせっぽう）『美術画報』19 編
巻1 19 年4 月5 日「夏の果物」の題で作品が残さ
れている。（東京文化財研究所『美術画報』所載デ
ータベース）。
- 33) 防府市立防府図書館『防府史料 第 62 集 大正 5
年 公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』平成 25 年
(2013)
- 34) 右田地区教育会『ふるさと読本 右田』平成 12 年
(2000) 桂家は、代々右田毛利家の家老職を務めた
家柄で、庭は「月の桂の庭」と呼ばれている。桂家
文書によると、正徳 2 年(1712)4 代桂運平忠晴が旧
宅を解体して新居を建てているが、築庭もこのとき
行われたものと思われる。
- 35) 福田和彦『日本の庭』河出書房新社 昭和 37 年
(1962)。
- 36) 山口県神社庁『山口県神社誌』昭和 47 年(1972)2 月
「王朝時代藤原氏国司として下向のとき南都春日
神社の分霊を奉斎し、のち文治 2 年(1186)俊乗坊重
源周防国司兼造東大寺使として、下向し牟礼一郷に
南都の粧を迂し再建す」。
- 37) 毛利就信（もうりなりのぶ）寛永 3 年生(1626)まれ
就信は、子の定道が早死した成果神仏を崇拝した。
貞享 2 年(1685)阿弥陀寺山門建造、寛文 7 年(1667)
春日神社再建、元禄 13 年(1700)右田海宝寺の薬師
堂建造、元禄 15 年(1702)熊野権現社再建 元禄 16
年(1703)死去。（防府市史 通史Ⅱ 近世編）。
- 38) 明治 15 年(1882)10 月に毛利藤内が右田邸内に開設
した「移風義塾」を明治 21 年(1888)に祥久が閉鎖
している。（右田村沿革）
- 39) 『防長新聞』大正 4 年(1915)5 月 6 日付。右田村太
平寺では右田村有志者の組織する「禅学講話会」が
開かれ、祥久も聴講会員として参加している。